私の保育

菅宮倫代

新学期が始まる前にいつも感じる不安（子供達の前に立ってうまく話せるだろうか？　子供達の中にうまくとけこめるだろうか？　子供達は私をスムーズに受け入れてくれるだろうか等々）を胸に今日も三学期がスタートした。

登園拒否まではいかないが気がかりだった、かおりちゃん、りえちゃん、みかこちゃんもにこにこ登園。ひねくれ屋のゆうちゃんも「なんだよ。」口をとんがらせて登園。「新しい年だからおめでとうございますってあいさつしましょうね」と言うと、「明けましておめでとうございます」と言う元気な声に続いて礼儀正しいようちゃんにつられて「本年もよろしくお願いします」と返ってくる。

みんなで保育室を自分達の遊びやすいように整備する。廊下に出してあった遊具・用具が見る見るうちに片付いていく。

二日目。お正月遊びをいくつか用意しておくが、男児は見むきもせず手慣れたBブロックの構成と警察ごっこに、二学期のままのメンバーで集まり遊びを始める。

カルタを始めようとする女児に「読んであげようか？」と言うと、「いいの、私達で読むから」とすげない返事。たどたどしい読み手の言葉を一生懸命聞きながら時間をかけてカルタ取りが行なわれている。一方、遊びのみつからない子供達にコマまわしを誘いかける。手を持って糸の巻き方から教える。「私できるもん」と援助を拒む子。男児に多い傾向だ。教わることをいやがり、自分の力だけでやろうとする姿勢がうれしい。できるようになった時の喜びも大きい。自分ができるようになると「先生、競争しようよ」と誘いにくる。二、三人でやっているうちにコマ回し競争の輪は広がっていく。できないと思って敬遠していた子もそっと試してみて思ったより簡単にできるので競争に意欲を燃やす。男児のプライドの高さを感じさせられたコマ回しである。

一年保育を九年間、二年保育を三年間、計十二年間の保育の積み重ねは、いろいろな事柄が見えてくるとともに、不必要なものをも含めていろいろな事柄が身についてきています。

「自分の保育の特色って何だろう」と考える時、保育を始めてまもない頃の発見や先輩の先生達から受けた指導のいくつかが私の中に根をはっていることに気づきます。

その一つは、初めて子供達の前に立った時のことです。五歳という年齢はほんの小さな子供だと思っていましたが、「親を離れた子供は一人の人間なんだ」という驚きです。

教師の援助があるとはいえ自分の力で精一杯住みやすい環境を作っていかなければならない姿はまさに大人の社会の縮図を見るようで「幼児なりにたいへんなものなのだ」と感激したものです。この様に感じたことは、その後の保育の中で幼児を一人の人間として扱っていこうとする姿勢になっています。幼稚園生活に安定するまでは別ですが、悪いことをすれば本気で怒ります。人の作った物をわざと壊した時などは、一生懸命作った友達に本当に悪かったと思うまで、初めの雷は頭ごなしに、後は子供と気持ちを通じあわせながら話をします。慣れてくるとこの頭ごなしの雷が落ちる時は最高に悪いことをした時だということに気づいていくようです。またからかわれればすねたり腹をたてたりします。

最近少々中年太りしてきた私は、まわりの先生達が細いのでよけい目立つのでしょう、「デブ、デブ」と男児がからかうのです。言いたいことが言えるようになってきた一つの成長（教師への親しみ）と受け止めた上で、少々むきになりすぎるなーと思いつつ、「女の人にとってデブとかブスとか言われるのはとってもつらいんだからね。すごーく傷つくんだから」と言い返す。私の不快感を子供にぶつけることによって、学級の中にいる肥満児へのけん制にもしていきます。

競争遊び等でも子供達の力が育ってきた時点では本気で開戦ドンやドッジボールの遊びに興じます。しかし悲しいかな、かつてはゆとりのある本気さでしたが今や精一杯の本気さに変ってきているのです。

二つ目は、一年目にした区内の公開保育研究会の時のことです。「こわいお面を作ろう」というねらいのもとに袋でお面作りをしました。ところが私の思い描いていたようなこわいお面が少しもできてこないのです。もちろん適切な助言ができていなかったせいもあると思いますが、その後の研究討議の時にそのことを言うと「子供達にとってこわい顔というのはどういう顔でしょうね。子供の目から見たら十分にこわい面がたくさんできているんじゃないのですか？」と言われ、なるほどそういう目で見ていく

と、その子なりに工夫してあるところが見えてくるから不思議です。この時自分のイメージに子供を合わせて見てはいけない。子供のイメージに自分がついていかなければならないということを教えていただいたのです。

このことは普段の保育の中であらゆる活動に言えることで、常々心がけてはいるのですがよく失敗をします。ついこのあいだも園内研究保育の折に見事に失敗してしまいました。

動物園に遠足に行って動物作りをする予定でしたが、あいにくの雨で水族館になりました。動きや形に特徴の乏しい魚に年少児がどこまで関心を示すか心配しておりましたが、貸し切りのようにすいている水族館の中で子供達は自由自在に動くことができ、気にいった魚を十二分に見入ることができたと思います。その時の印象が鮮明だったせいでしょうか、導入の段階でやる気をみせすぐに製作にとびついていきました。問題はその時の導入の仕方で、どういう風にしたら魚の口が表現できるかに固執してしまい、私のイメージを子供達に押しつけてしまったのです。なぜその時そのように固執してしまったのか指摘されてもよくわかりませんでしたが、何か一つ新しい方法を教えたいという気持ちが、魚の口をあけねばならないという思いになってしまったのです。その結果はもちろん忠実に守ろうとする子も多かったのですが、まるで関係なく特にデンキウナギ・サメ・ワニ等に関心を持っていた男児にはまったく無益な指導でした。自分ではそう心がけているつもりでも他からの目がない時にはけっこう自分のイメージを押しつけているのではないかと新たに身をひきしめる思いがしました。やはり第三者の目で時々自分の保育を見ていただくことも大切なことだと痛感致します。

三つ目は、やはり区内の研究会で先輩の先生からうかがった時のことです。まだその頃は子供達をうまく手の中に納めることができず、大声をはりあげることの多かった時期です。子供を集め話を聞かせたい時に「静かにしなさい」「話を聞きなさい」を繰り返すのでは子供の聞く態度は育たないということです。集まれば先生が何か楽しいことをしてくれるのだという期待感を積み上げることで「おや先生が何かはじめたぞ。今日は何がはじまるのかな?」「おもしろそうなことがはじまるぞ」と教師の姿を見て自然に集まり待つようになるという話です。

プリントや画用紙一枚配るにしてもただ機械的に配るのではなく、「今日はこの右のはじっこの方だけつまんで持っていこうね」とか「左手でとってみよう」等変化をつけることの大切さです。このことは一日の保育の流れの中であらゆる場面に応用していけることで、私は私なりにいろいろの方法を試みてきました。子供

達に迎合するということではなく、子供も教師も楽しみながら一日を過すということです。

たとえば、ジャンケンゲーム一つを例にとってみれば、ジャンケンを基礎としてはじめは勝った方が負けた相手を連れてきてその数によって勝敗を決めますが、その遊びをちょっと変化させて、Bブロックをもってジャンケンをして勝った方が負けた方のブロックをもらってその分を積み上げていくという方法をとるとまた違ったおもしろみがでてきます。単純なジャンケンゲームですが方法をちょっと変えることで二年間を十分に楽しめる活動になります。

以上の三点が私の保育の姿勢です。このことが子供達をしめつけることなくけじめのある学級経営が比較的若い時期からできていた理由ではないかとうぬぼれています。

前にも書いたように私は一年保育が長い。一年保育の場合、どの子供とも一応心が通じあい保育の楽しさを感じるのが二月でした。せっかく慣れ親しみこれからという時の卒園。何度も残念に思ってきました。そしてやっと念願かなって二年保育に移れたのです。ところが残念ながらその当時のクラス編成は生れ月の早い子と遅い子に分けられていて私の受け持ちは生まれの遅い子供達の組でした。誰でも仕事を続けていれば多少の自信はもっているものです。私も一年保育の八・九年目は研究保育でずいぶんたたかれ、子供を見る目も開け保育にも自信がついてきた頃でした。私はこの自信で、子供の発達の姿を無視して何とかとなりのクラスの実態においつきたいと思いあせっておりました。頭ではわかっていても二年目の人と比べたらもっといろいろなことができるはずだ。追いつくことができるとうぬぼれていたのです。しかし結果は無残なものでした。実態を考察していくにつれて差が歴然となってくるのです。この経験で私は子供の実態をみきわめ、決して無理をしてはいけないことを学びました。

年長になり、自分のクラスから半分、隣りのクラスから半分という編成になりました。指導のまずさも手伝って期待したような心のつながりはもてなかったような気がします。

幸い今年度から私達の希望がかなって普通のクラス編成になりました。

子供達は現在、私を必要な時に援助を求めたり仲間にしたりしながら順調に成長しています。一年保育でも昨年度の保育でも味わえなかった「その先の手ごたえがどうなるのか。」を楽しみに今日も保育に専念しています。

（東京・港区立青南幼稚園）